

ヴァナキュラー研究とは何か

安 保 寛 尚

0. はじめに

ウェルズ恵子教授の大きな功績の一つに、立命館大学国際言語文化研究所に所属する「ヴァナキュラー文化研究会」を牽引してこられたことがある。筆者も所属するこの研究会は、文学、人類学、民俗学、言語学、地域研究など、多様な専門分野の研究者が集う学際的な場だ。そこで研究されている「ヴァナキュラー」とは何か。ウェルズ氏自身は、「より多くの人に近しいもの、強く真実な訴えを持ったもの、長い年月を生き延びる価値を潜在させた文化、革新の始まり、というニュアンスを持っている」（ウェルズ 2018：vii）語と述べている。日常的なものだが強靱さを備え、伝統的でありながら革新性を秘めるものということだ。人間の文化活動の根底にある創造性と言えるかもしれない。

ヴァナキュラーは、近年特に米国の民俗学においてフォークロアに代わる用語として注目を浴びており、日本の民俗学研究でも紹介が進んでいる（小長谷（2017）、島村（2020）など）。とはいえ、まだ学問的位置づけは定まっていない。その上、ウェルズ氏の「ヴァナキュラーなもの」についての考えが物語るように、それは民俗学だけで解明できる研究対象ではなくて、幅広い観点からの研究が協同することで立体的に浮かび上がってくるものであるように思う。

オックスフォード英語辞典を引くと、ヴァナキュラーは第一に特定の国や地域における発話や言語を意味し、名詞と形容詞の用法がある。そのため「ヴァナキュラー研究」と言えば、言語についての研究と理解されるかもしれない¹⁾。しかし同辞典には、「ヴァナキュラーの文芸作品の」、「その土地固有の建築（の）、芸術の」という意味も載っている。さらに現在では、ヴァナキュラーは様々な民衆文化を指す言葉としても使われている。本稿のタイトルは、言語としてのヴァナキュラーだけでなく、そのような「ヴァナキュラーなもの」のさまざまな表出の研究を意味する。そして本稿の目的は、ヴァナキュラーの用語の出発点からその概念の変遷を辿った上で、「ヴァナキュラー研究」の射程を明らかにすることである。

1. ラテン語とヴァナキュラー

「ヴァナキュラー（vernacular）」は、「主人の家で生まれた奴隷」あるいは「その土地で生まれた人」を意味するラテン語の vernaculus を語源としている。つまり、ある特定の場所や土地との結びつきを表す語である。そこから、中世・ルネサンス期のヨーロッパにおいて国際的に通用した上位のラテン語に対して、下位の地方語という意味で定着した。ラテン語がヨーロッパ各地の王族、貴族、政治家や聖職者など、社会の支配者に使用される普遍的言語である一方、ヴァナキュラーは地方の民衆間で使用される話し言葉を指したのだ。つまり、公的権威を持たない土着的な日常言語がヴァナキュラーだった。

そのようなヴァナキュラーは、具体的には、例えば当時まだ整った言語体系や文字を持っていないイタリア語やスペイン語、フランス語などである。ローマ帝国の崩壊後、西暦 550 年から 700 年頃、ラテン語の話し言葉、いわゆる俗ラテン語がそれらロマンス諸語の初期形態に分化した。当時のヨーロッパでは、もちろんロマンス諸語だけでなく、ゲルマン諸語などラテン語以外のルーツを持つヴァナキュラーも使用されていたのであり、オングの言葉を借りれば、ヨーロッパは少し移動しただけでお互いの言葉が通じなくなる「何百もの言語と方言の泥沼」(オング 1991: 232) だった。言わばバベルの塔の崩壊後のように、無数のヴァナキュラーが話される言語的混沌にあって、ラテン語は共通語としての機能を果たしたのだ。

ラテン語の使用は、600 年頃から 1100 年頃までおよそ教会に限られていた(アウエルバッハ 2020: 272)。しかし 12 世紀に入ると、ヨーロッパ各地に都市が発展し、人の自由な移動が生まれた。そして大学が形成されると、ラテン語を介して神学や哲学、医学などが学ばれるようになる。そのような学問の発達、アラビア半島から勢力を拡張する過程で、ギリシャ・ローマの文化遺産を吸収していたイスラムの影響によって促された。特にスペインでは、イスラムによる侵略を受けた後、長期に渡ってイスラム教徒、カトリック教徒、ユダヤ教徒が共存する中で、トレド翻訳学派がその遺産をアラビア語からラテン語に翻訳したことが知られている²⁾。12 世紀ルネサンス³⁾と呼ばれるこうした活動が、ギリシャ・ローマ文明の知の「発見」と再生をもたらし、14 世紀にはイタリアにルネサンスを開花させる。したがって、中世から近代への橋渡しとなる人文主義や自然科学の発展を可能にしたのが、まさにラテン語であった。ラテン語は、単にお互いの言葉が通じないヨーロッパ人の間の共通言語というだけでなく、文化的活動と学術的発展に欠かせない手段だった。ヴァナキュラーに対してラテン語が上位に位置づけられたのには、このような背景があったのだ。

とはいえラテン語は、すでにヨーロッパの人々の母語からは大きく乖離した言語になっていた。その読み書きを習得する機会を得たのは、学校教育にアクセスできる限られた裕福な家庭の男子だけである。つまりラテン語は、書かれた文字によって統御された「学校言語」であり、人々の日常生活の干渉が排除された「古い外国語」だった。それゆえ、「情緒的な負荷をもった母語の深層から切りはなされ」(オング 1991: 235)、生きた声の文化の機能をおよそ失っていた。しかしその反面、抽象的な思考と客観的な学術研究には適していたのだ。

2. ヴァナキュラーの口承文芸とヴァナキュラー文学

ラテン語が学術言語として確固たる地位を築く一方で、ヴァナキュラーの口承文芸が次第に文字に記録され始める。11 世紀末から 12 世紀初頭には、フランスの『ローランの歌』や、スペインの『わがシッドの歌』など、ヴァナキュラーがラテン語と同じローマ字で書き起こされた武勲詩(仏語 *chansons de geste*) が成立した。それらは古い伝説をもとに、旅芸人(ジョングルール, 仏語 *jongleur*) たちが口承で伝えていた物語詩の断片を、教養人が一つの叙事詩にまとめたものと考えられている。ジョングルールはラテン語の *joculator* に由来し、「冗談好き、からかい好き」を意味する。この旅芸人たちの中には、楽器演奏や踊り、曲芸で客を楽しませる者もいたが、伝説を朗読して客を物語世界へ誘う者もいたのである。

12 世紀に入ると、フランス南西部にオック語で歌い、書く吟遊詩人(トロバドル, オック語

trobador) が現れる。Trobador の動詞形 trobar は、オック語で「詩作する」という意味で、貴族や領主、騎士、従士など、比較的身分の高い者たちが各地の宮廷でその技芸を披露した。とりわけ、武勇を讃え、貴婦人への洗練された愛を語る騎士道の詩歌が生み出され、その影響はスペインやイタリアにも及んだ。他方で、この伝統がフランス北部に伝播すると、オイル語⁴⁾で詩作する吟遊詩人が登場する。その中でも、クレチアン・デ・トロワは古代ケルト文化に新しい息吹を吹き込んだことで知られる。すなわち、アーサー王伝説などが、独創的な愛と冒険の物語に再創造されていったのだ⁵⁾ (岡本・小宮 2019: 8)。同じ頃、ドイツでも同様に、宮廷で徳と理想の愛を歌うミンネジンガー (Minnesinger) が活躍する⁶⁾。

ルネサンスが開花する 14 世紀には、聖職者を含む教養人によって、ヨーロッパ各地でヴァナキュラーによる文学作品が誕生し始める。その嚆矢でありまた最高傑作は、言うまでもなく、イタリアのトスカーナ方言で書かれたダンテの『神曲』(1321) だろう。その後、例えばスペインでは、イタの主席司祭による『よき愛の書』(1330, 改訂版 1343) など、教養派文芸 (mester de clerecía) と呼ばれる詩や物語が書き残された。こうして、ルネサンス期を通して文字表現の技術を獲得したヴァナキュラーは、やがて近代国家の形成において国家語の地位につく。ヴァナキュラーの地位は、それら国家語の下位に置かれた地方語へと移るのである。

このように見てくると、中世からルネサンスにかけて、上位のラテン語と下位のヴァナキュラーは、決して固定的な地位にあって断絶していたわけではないことがわかる。旅芸人によって各地の伝説がヴァナキュラーの口承伝統と化し、拡散すると、これを文字化する教養人が現れ始める。その文芸作品は、母語の情緒と人々の生活に根ざした声の文化を映し出すものだった。そして吟遊詩人はこれを宮廷文化に洗練させる。宮廷では、その技芸と朗読に、楽師による音楽や踊りが加わって、躍動的で情感に満ちた物語世界が喚起・再現されていただろう。そして都市の形成・発展と共に次第に増加していった教養人は、ラテン語を学び、ギリシャ・ローマの古典文学をモデルとしつつ、ついにヴァナキュラーの文学言語を生み出した。それは、ラテン語から語彙や統語法、修辭的文体などを吸収・利用し、話し言葉と書かれた言葉の間にある溝を埋める工夫を通して誕生した、相互作用的で複合的な産物と言える⁷⁾。

では、ここまで見てきたラテン語との対比、共存と交渉、その結果の変容を踏まえてヴァナキュラーの概念をまとめてみよう。ヴァナキュラーはまず、公的権威のある上位言語に対して下位に位置する言語である。その言語的特徴としては、母語とその土地の日常生活に根づいた言語であり、声の文化としての機能を持つ。ただし、上位言語との関係は断絶しているわけではなく、共存する中で両者は接触する。とりわけ、両言語の境界を行き来する吟遊詩人や教養人の手によって、生きた言語のヴァナキュラーは変容したのだった。したがって、ヴァナキュラーの口承文芸は文学へと発展する可能性を秘めている。いわゆる「俗語文学」は、「ヴァナキュラー文学」と呼ぶことも可能だろう。

3. ヴァナキュラーとフォークロア

前章で見たように、ヴァナキュラーはその初期の語義においては、もっぱら言語とその文芸作品を指す言葉として用いられていた。ところが近年は、民俗学や文化人類学の分野で、フォークロア

に代わる用語として盛んに用いられるようになっていく。ヴァナキュラーとフォークロアはどう関係するのか、またその用語の置き換えと語義の変化はどう理解したらよいのだろうか。本章では、ヴァナキュラーの口承伝統が19世紀にフォークロアに包含され、これが口承伝統だけでなく土着的な文化や伝統を広く指す言葉として定着した経緯を辿る。しかしその後、フォークロアが政治思想と結びつくことによってどのような問題が起きたのかを明らかにしよう。

民俗学は、17世紀後半からイギリスやフランスに興った啓蒙主義への反発としてドイツで生まれた。合理性と普遍性を理念とする啓蒙思想においては、民衆の土着的な言葉や生活・思考様式は理性によって排除されるべき対象に他ならなかった。これに対して、ドイツの哲学者ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（1744-1803）が異議を唱え、各地固有の暮らし、言葉、思考を掘り起こし、大切にする必要を訴え、日々の暮らしの中で歌われる民謡の採集に着手したのだ（島村 2020：17-18）。そして民謡の中でドイツ民族の精神や歴史を記憶し、語り継ぐ素朴な無名の人々を「フォルク（Volk）」と呼んだ（小長谷 2017：160）。このようなヘルダーの取り組みを継いだのがグリム兄弟であり、二人はドイツの昔話や伝説の収集と研究の成果として『グリム童話集』（1812（第1巻）、1815（第2巻））を刊行する。

ドイツは三十年戦争（1618-1648）の結果、多くの領邦に分裂した状態が続き、1806年にはナポレオンの侵略を受けた。その結果、当時の上流階級の間では、ラテン語とフランス語が支配的言語となっていた（小長谷 2017：36）。したがってヘルダーらの取り組みは、「フォルク」のヴァナキュラーの救出だったとも言える。しかしながら、同様の運動がドイツ国外へも展開すると、民謡や神話、伝説などの文芸は「フォークロア（folklore）」と呼ばれるようになる。「フォークロア」は、イギリス人古事学者ウィリアムズ・トムズの造語である。トムズは1846年に、ドイツにおけるヘルダーやグリム兄弟の研究をイギリスでも行おうと、「民の知識」を意味する「フォルクスクンデ（Volkskunde）」というドイツ語を参考に、ドイツ語の「フォルク」と、「伝承」を意味する英語の「ロア（lore）」を組み合わせた新語を生み出したのだ。

フォークロアは、その出発点においては、中世からルネサンスにおけるヴァナキュラーの口承伝統と同様の対象を指していたと言ってもいいだろう。けれども、「民の知識」あるいは「民の伝承」というその言葉の意味が導くように、フォークロアはやがて言語による創作の範囲を超えて、民間信仰や儀礼、祝祭や婚礼、年中行事などもその対象に含み、民俗学を発展させていく。それはヴァナキュラーとフォークロアの連続性を踏まえると、ヴァナキュラーの概念が拡張された状況、つまり口承文芸だけでなく、民衆文化の現れをより幅広く含むようになった状況と言える。別の言い方をすると、ヴァナキュラーの口承文芸はフォークロアの一部と化した。こうしてヴァナキュラーという用語は見えにくくなったのだ。

しかし19世紀に近代国家が建設されていく過程において、フォークロアは民衆を国家の主体とするイデオロギーと合流する。するとフォークロアは、民族、言語、文化の一元的統合を促す象徴となり、その純粋さと単一性が追求された（小長谷 2017：37）。つまり、ナショナリストの知識人たちによって、多様な民衆文化の雑多なものの中から、国民統合の上で必要と判断された要素だけが、戦略的にフォークロアとして選択・抽出されたということだ。それは当然、ローカルチャーの中における差別化を引き起こしただけでなく、ハイカルチャーとの差異化をももたらした。そして「前近代的で」「素朴な」民衆文化という位置づけ（ウェルズ 2018：vii）が、時代や環境の変化によっ

て起こった変容を認めず、フォークロアには「古くさい」固定化された過去のイメージがこびりついていた。その結果、今日に至っては、フォークロアは「時代遅れの田舎の農民たちが伝えている、どこか奇妙で、でも懐かしいものごと」（島村 2020：34）と受け止められるようになる。

4. ヴァナキュラー建築

前章で見たように、近代国家形成の過程で、フォークロアには「過去のものごと」と「低俗性」という負のイメージが固着した。しかし本来、フォークロアが意味する民の知識や伝承は、いつも古いもの、変化のないものではない。それは社会環境の変化やハイカルチャーとの関係の中で絶えず変容し、更新を続ける生きた文化だからだ。そこで、フォークロアという用語が招く誤解と束縛を解くために、光が当たった用語がヴァナキュラーである。特に近年は、米国の民俗学・文化人類学の分野でヴァナキュラーの新たな位置づけに向けた探求が行われている。そのきっかけをつくったのは、「ヴァナキュラー建築 (vernacular architecture)」という語の使用の広がりである。本章ではその展開を見ていこう。

19 世後半、イギリスに産業革命が起こり、都市で人口が急激に増加すると、それに伴って労働者の劣悪な住宅が多く建造されていった。ヴァナキュラーは、そのような建築を問題視した建築の専門家たちによって用いられ始めた。つまり、労働者階級の粗悪で低俗な建築という意味でヴァナキュラー建築という語は使い出された。

だが産業革命によって増えたのは、労働者のための粗末な住宅だけではない。近代的工場での機械生産は、安価で低品質な生活品を溢れさせた。するとそのような状況を批判し、職人の手作業による工芸品を見直して、生活と芸術を結びつけようとする動きが起こる。ウィリアム・モリス (1834-1896) らが主導したこの動きは「アーツ・アンド・クラフツ運動 (Arts and Crafts movement)」と呼ばれる⁸⁾。

この運動がヴァナキュラー建築の概念の転換において重要なのは、産業革命が生み出した近代主義や合理性によって抑圧され、その価値を貶められているものとして、周縁的なものや人々の日常的な物質文化への再評価が始まったことだ。その対象に「普通の人々の」建築が加わると、ヴァナキュラー建築はやがて、都市部の粗末な労働者住宅ではなく、地方の民衆がその気候や風土に適応させて生み出した建築を指すようになる。そのような建築には、地域の人々の生活空間と結びついた歴史と伝統を反映する独自性があるとして、積極的な文化的価値が見出された。

イギリスに始まったアーツ・アンド・クラフツ運動は各国に影響を及ぼすが、20 世紀後半から特に米国においてヴァナキュラー建築の学術研究が発展し、ヴァナキュラーの新たな概念の構築が進む。今福は、デル・アプトンとジョン・マイケル・ヴラチによる『日常的な場所－アメリカのヴァナキュラー建築の解釈』*Common Places: Readings in American Vernacular Architecture* (1986) を引用しつつ、その定義を次のようにまとめる。

ヴァナキュラー・アーキテクチュアとは「ハイ・スタイル」でない建物であり、プロフェッショナルな建築家によってデザインされたものではなく、モニュメンタルな要素もうすく、洗練されていない「たんなる建築」(mere building) である。だがそれはけっして地方の伝統的な庶民

の建築物だけをさして、都会の建築物を排除するものでもない。民家であれ、大量生産の分譲住宅であれ、あるいは都市の商業建築であれ、そのデザインや技術の実践にかんして日常生活に基礎をおいた特定の「文化パターン」との関連が認められるとき、それらはヴァナキュラーと呼ばれるのである。(今福 2003: 170)

このように、日常生活とその実践を軸としたヴァナキュラー建築理論は、雑多であり、横断的、流動的、可変的なローカルチャーとしてヴァナキュラーの定義を試みる。そして建築物そのものだけでなく、そこに織り込まれた民衆の生活文化へと踏み込んだヴァナキュラー建築研究の影響は、民俗学や文化人類学へと波及する。米国の民俗学は伝統的に言語文化研究が中心だったが、そこに物質文化研究を含む総合的なアプローチが提唱された。すると、そのような働きかけを受けた民俗学研究において、ローカルチャーの枠に限定され、硬直したフォークロアのイメージを乗り越えようとする動きが起こる。こうして、フォークロア、すなわち民の知識・伝承が本来持つ生命力を回復させるために、負のイメージを帯びていない「ヴァナキュラー」を採用するという現在のアメリカ民俗学の潮流が生まれたのだ。

さらにここにてヴァナキュラーは、かつてラテン語と対比されたヴァナキュラーの語義と歴史的変遷の記憶を回復し、上位の言語との横断的関係性や相互作用、そして変容の潜在力を確認する。小長谷はロジャー・D・エイブラハムズの『日常生活－ヴァナキュラーな実践のポエティックス』*Everyday Life: A Poetics of Vernacular Practices* (2005) を引用して、「ヴァナキュラーなもの (vernacularity)」とは、地位や身分の低位の者と高位の者の言葉およびその反復が呼び込まれるプロセスであり、豊かな包容力をもって、伝統的なものと革新的なもの、知識人と大衆を包含し、様々な社会的相互作用に表出するそれらの言葉遣いの展開を解明するプロセス (小長谷 2017: 49) と述べている。ここでエイブラハムズが言う「言葉」あるいは「言葉遣い」は、民俗学が結びつきを深化させたヴァナキュラーの言語文化と物質文化を包含する、多様な文化的実践を指しうると考えてよいだろう。

5. おわりに：ヴァナキュラー研究の射程

ここまでの話をまとめよう。ヴァナキュラーは、初期の語義に遡れば、国際言語として公的権威のあるラテン語との対比において、地方の日常的な話し言葉を意味した。しかしその口承文芸がやがて文学を生み出し、ついには国家語の地位につくように、ヴァナキュラーは上位のラテン語からの影響を受けて、常に変容を続けていた。つまり、人々の日々の生活の中で変わり続ける生きた言語がヴァナキュラーである。

18 世紀のドイツにおいて、ヘルダーの呼びかけで始まった「folk」の民謡採集が民俗学を発展させると、ヴァナキュラーの口承文芸はやがて幅広い民衆文化を含むフォークロアの一部となる。ところが国民国家形成の過程で、ナショナリズムの性格を帯びたフォークロアが創出され、さらに固定されると、それは時の経過と共に次第に「古くさい」イメージを帯びる。フォークロアはその語源において民の知識・伝承を意味し、実際には時代や社会の変化に応じて柔軟に変化していくものである。つまり、フォークロアの本来のあり方を歪めるイメージがついてしまった。

これを見直すきっかけとなったのがヴァナキュラー建築への注目だった。イギリスに起こった「アーツ・アンド・クラフツ運動」が近代主義を批判し、日常的な物質文化の評価を促すと、特に米国でヴァナキュラーについての新たな理論構築が進む。ヴァナキュラーは、誤解を生むフォークロアの用語に代わり、可変的で流動的な民衆の日常文化として民俗学に新たな視座を提供しているのである。

以上を踏まえて、「ヴァナキュラー研究」のあり方と射程を明らかにしたい。まずヴァナキュラーの語源と初期の語義を踏まえると、ある土地の話し言葉に関わる研究が一つ目の柱になる。ただし、ヴァナキュラーそのものの言語学的研究というよりも、上位言語との関係性や変化を視野に入れた研究が課題となるだろう。他にも、マスメディアの発展に伴う文字の文化と声の文化の関係の変化や、今日ソーシャル・ネットワークにおいて形成されている参加型コミュニケーションの場なども関心の対象である。

二つ目の柱がヴァナキュラー文化だ。ヴァナキュラー文化とは、「ある集団の人々の生活に深く関連した文化と、特定の時期や時代や状況や土地で発生した文化、および、そうした文化の底流となっている伝統を指し」、「人間の生の営みに関わるありとあらゆる活動を含む」（ウェルズ 2018 : viii）とするウェルズの定義に依拠しよう。そうすると、フォークロアがヴァナキュラーの口承文芸から拡張してきた幅広い民衆文化を包含する。けれども、ローカルチャーの枠内に限定されるのではなく、ハイカルチャーとの接触・交渉とその結果としての変容が特に注目されるだろう。例えば、国民的主体を象徴する「フォークロア」からこぼれ落ちた雑多なもの、近代における周縁的なもの、植民地支配における被抑圧者の語り、現代のマイノリティの文化的実践など、その対象は多岐に渡る。

最後に、ヴァナキュラーとヴァナキュラー文化の両方にまたがる文芸作品が三つ目の柱である。そこではまず、ヴァナキュラーの口承文芸およびヴァナキュラー文学（俗語文学）がテーマになる。ただし、それは中世からルネサンス期の作品だけに限定されない。過去のヴァナキュラーの文芸作品のモチーフの反復や再創造、パロディもまた重要な分析対象になるだろう。また、世界各地の口承伝統を利用・加工した文学作品について、新たな分析の切り口にもなると思われる。

「ヴァナキュラー」は近年米国の民俗学で盛んに使われ出した用語であり⁹⁾、新奇な印象を与えるかもしれない。しかし結局のところ、私たち人間が生まれたそれぞれの土地で、時代や環境の変化に応じて、日々生活する中で生み出し、柔軟に変容させながら連綿と受け継いできたものを指している。そうすると「ヴァナキュラー研究」とは、そのような人々の日常的な文化実践の創造性を観察し、分析することに他ならない。それは多様な学術分野が横断的に関わる、とても広くて魅力的な一つのプラットフォームと言えるのではないか。

注

- 1) 難しいのは、「ヴァナキュラー建築」や「ヴァナキュラー文化」などのように「ヴァナキュラー」を形容詞として使うと、言語としてのヴァナキュラーをどう区別するかという問題である。つまり「ヴァナキュラー言語」は同義反復のように聞こえるのだ。本稿の最後で、筆者は「ヴァナキュラーなもの」の研究として、言語、文化、文学の三つの柱を立てた。したがって、ヴァナキュラーを形容詞とするなら、「ヴァナキュラー言語文化文学研究」とするのが正確だが、やや長い。さしあたって本稿ではこれを「ヴァナキュラー研究」と呼び、用語をどうするか今後の研究課題とする。

- 2) イスラム支配下において、キリスト教徒とユダヤ教徒は「啓典の民」として改宗を強制されなかった。そして改宗しなかったキリスト教徒のうち、アラビア語を自在に操るようになった者はモサラベと呼ばれた。レコンキスタが進展し、トレドが奪還されると、そのモサラベやユダヤ教徒がアラビア語の文献をラテン語に翻訳する作業において重要な協力者となる。また、イギリス人やイタリア人など多くの外国人研究者がトレドに集結し、医学、天文学、錬金術、数学、哲学、論理学などのテキストの翻訳活動に従事して、その成果を故郷に持ち帰った。
- 3) 12世紀ルネサンスはスペインだけでなく、シチリアや北イタリアもまたその拠点になった（伊東 2006：58-62）。
- 4) オイル語はフランス北部で話されていた諸方言の総称で、そのうちパリで話されていたものが標準フランス語となる。
- 5) アーサーは、5世紀のブリテン島で、大陸から侵入してきたゲルマン民族のアングロ・サクソン人を追放した、ケルト系ブリトン人の隊長である。その伝説が口承で伝えられ、ジェフリー・オブ・モンマスの『ブリタニア列王史』（1138）において偉大な王として脚色された。『ブリタニア列王史』はラテン語で書かれていたが、当時フランスでは、ラテン語の文芸作品を母語のヴァナキュラーに翻訳する動きが始まっていた。「ロマンス」はもともとそれらの翻訳書を指したが、やがてクレチアン・ド・トロワら吟遊詩人らが生み出した恋愛や冒険を指す語となった（岡本・小宮 2019：6-8）。
- 6) ミンネジガーについては上尾（2006）を参照されたい。
- 7) アウエルバッハは、このようなヴァナキュラーによる人文主義の動きを「現に在るものを発見し日常的な己れの生を掴み取り、型にはまった教訓的図式からその描写を解放しようとする試み」（アウエルバッハ 2020：327）と表現している。
- 8) ウィアム・モリスと「アーツ・アンド・クラフツ運動」については、例えば藤田（2009）が入門書として参考になる。
- 9) 地域や国によってはヴァナキュラーという用語は一般的ではなく、フォークロアが継続して使用されている。その場合は「ヴァナキュラー研究」のアプローチの仕方を検討しなければならない。またプロップは、ロシアでは精神文化に関わる口承文芸をフォークロアと理解する一方、建造物や服装などの物質文化はフォークロアとは見なさないと述べており（プロップ 2009：245-247）、その概念の国ごとの違いについても注意が必要である。

参考文献

- アウエルバッハ、エーリヒ（2020）『中世の言語と読者ーラテン語から民衆語へー』新装版、小竹澄栄（訳）、八坂書房。
- 伊東俊太郎（2006）『十二世紀ルネサンス』、講談社学術文庫。
- 今福龍太（2003）『クレオール主義』、ちくま学芸文庫。
- 上尾信也（2006）『吟遊詩人』、新紀元社。
- ウェルズ恵子（編）（2018）『ヴァナキュラー文化と現代社会』、思文閣出版。
- 岡本広毅、小宮真樹子（編）（2019）『いかにしてアーサー王は日本で受容されサブカルチャー界に君臨したかー変容する中世騎士道物語』、みずき書林。
- オング、ウォルター・J.（1991）『声の文化と文字の文化』桜井直文ほか（訳）、藤原書店。
- 小長谷英代（2017）『＜フォーク＞からの展開ー文化批判と領域史』、春風社。
- 芝修身（2016）『古都トレドー異教徒・異民族共存の街』、昭和堂。
- 島村恭則（2020）『みんなの民俗学ーヴァナキュラーってなんだ？』、平凡社。
- 藤田治彦（2009）『もっと知りたいーウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』、東京美術。
- プロップ、ウラジーミル（2009）『魔法昔話の研究ー口承文芸学とは何か』齋藤君子（訳）、講談社学術文庫。
- モリス、ウィリアム（2020）『民衆の芸術』中橋一夫（訳）、岩波文庫。
- ルドルフスキー、バーナード（1984）『建築家なしの建築』渡辺武信（訳）、鹿島出版会。

（本学法学部教授）

In Search of Defining Vernacular Studies

by

Hironao Ambo

This article attempts to define the concept of vernacular studies. It is known that recently in the U.S.A. the term “folklore” has been replaced by “vernacular” especially in folklore studies because its “premodern” or “rustic” image, representing the integrity of the ethnicity of a nation, poses an obstacle to correctly understanding the term. And now the concept of vernacular is a subject of active discussion in the field.

The subject of vernacular requires interdisciplinary research. For instance, the word “vernacular” meant the native speech or language of a country or district as opposed to Latin and could refer to its oral or written literature from the Middle Ages to the Renaissance. This demonstrates the necessity of approaches not only from folklore studies but also from linguistics and literature to more comprehensively explore the concept of vernacular studies.

Therefore, this article examines how the concept of vernacular has changed focusing on the appearance of folklore studies in the 18th century and vernacular architecture in the 19th century. The analysis points to the changeable, fluid, and interactive nature of vernacular. Finally, the article proposes a variety of studies that might contribute to the clarification of many aspects of cultural practices of vernacular.